

令和 7 年度事業報告書

公益財団法人名古屋みなと振興財団

I 総括事項

公益財団法人名古屋みなと振興財団は、「名古屋港水族館」及び「名古屋港ポートビル及びガーデンふ頭臨港緑園」の指定管理者として、名古屋港における海事思想の高揚と海洋文化の普及並びにガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する各種事業を実施した。

令和 7 年度の名古屋港水族館の入館者数は、約 242 万人となり、開館翌年度(平成 5 年度)の約 291 万人、令和 5 年度の約 244 万人に次ぐ、歴代 3 位となった。また、名古屋港ポートビルの展望室、名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじの入場者数は、3 施設合計で前年度比約 3%増の約 56 万人となった。

また、令和 7 年度は、南極観測船ふじが開館して 40 年目を迎え、年間の定例行事に加えて各種の記念事業・イベントを実施した。記念事業・イベントの企画・実施にあたっては、南極観測船ふじと「南極への旅」を展示テーマとする名古屋港水族館南館が連携して財団全体で取り組み、ガーデンふ頭諸施設の認知度の向上・回遊性の創出に努めた。

1 公益目的事業

(1) 海事思想及び海洋文化の普及に関する事業

① 指定管理施設（名古屋港水族館）を活用した海洋生物の展示等（資料 2）

海洋生物の展示にあたっては、展示テーマに沿った計画を策定し、生物の健康と飼育環境を適正に管理した上で生物の特性を引き出す展示を行った。また、飼育係や解説ボランティアによる解説を実施した。

ア 特別展は、南極観測船ふじ開館 40 周年を記念して、「南極観測隊と南極観測船 ～「ふじ」で行く南極への旅～」を開催した。また、“ホソスジマンジュウイシモチの繁殖個体”、“夏”、“ハロウィン”、“クリスマス”、“正月・干支”、“バレンタインデー・ホワイトデー”、“春”など時機を捉えた各種展示を行った。

イ ゴールデンウィークと夏休み期間中は、混雑緩和及びサービス向上を目的にイルカパフォーマンスとシャチの公開トレーニングの回数を増やして実施した。

ウ シャチの「リン」は 13 歳を迎え、体長が 5.1m、体重が 2.0 トンを超えるなど順調に成長している。「アース」が 8 月 3 日に死亡した後は、「リン」とバンドウイルカを同居させて飼育展示している。「アース」死亡後は、イルカとの安定飼育を最優先として公開トレーニングを休止したが、10 月 28 日から再開し、以前と変わらぬ人気を集めている。

エ 令和 6 年度の 3 月 25 日にリニューアルした「イルカパフォーマンス BLUE ECHO」を順調に継続開催している。BLUE ECHO では、「青い地球、青い海と共鳴しながら美しい地球を次世代へ繋げて行こう」という保全のメッセージを伝えるだけでなく、各回ごとにイルカが異なる種目を経験できるようにするなど、アニマルウェルフェア（動物福祉）にも配慮している。また、

パフォーマンスの開始前には、当館における海洋生物の研究について紹介する動画を上映している。

オ バンドウイルカの繁殖については、5月に八景島シーパラダイスへブリーディングローン中のオス「クイック」の精液を用いた人工授精を行い、現在「アン」が妊娠中である。令和8年5月から6月の出産に向けて順調に経過しており、腰部に湾曲的症状がある「ハッピー（8歳メス）」と同居している。「ハッピー」は誕生する赤ちゃんのよき遊び相手になることが期待されている。南知多ビーチランドから精液の提供を受け、当館の「ウィニー」に人工授精を行い、令和6年10月に誕生したオスは公募により4月に「ラッキー」と命名された。「ラッキー」は骨に異常が見つかり、成長も遅いなど「ハッピー」と同様の症状である可能性があるが、現在は順調に経過しており、母親の「ウィニー」との親子での同居展示は好評である。「レイ（4歳オス）」は順調に生育し、イルカパフォーマンスに参加している。

カ 当館で誕生したベルーガの「ナナ」と「ミライ」は順調に成長し、18歳と13歳を迎えた。「ナナ」は5月に妊娠し、令和8年夏に出産予定である。

「ベルーガ公開トレーニング」は1日2～3回実施し、ベルーガの生態を分かりやすく紹介する「ベルーガの不思議な魚の食べ方」は、土日祝に1日1回実施した。また、令和8年2月から水中観覧窓で飼育係がベルーガの体のつくりやユニークな生態を詳しく解説する「ベルーガトーク～二つの窓を行ったり来たり～」を実施した。

キ 黒潮大水槽で実施するイベント「マイワシのトルネード」は、照明と音楽を時節ごとに変更して好評を得た。

ク 公式ホームページでは、トピックスの頻繁な更新、飼育係による「スタッフコラム」掲載など最新情報の発信に努め、今年度のホームページセッション件数は5,488万件となった。また、SNSへの投稿にも努め、フォロワー数はフェイスブック47,347人（昨年度47,181人）、インスタグラム109,109人（昨年度100,238人）となった。

ケ マスメディアに対しては、話題性のある情報を提供するため、積極的なニュースリリース及び取材対応に努め、73件のニュースリリース（昨年度78件）と223件の取材対応（昨年度219件）を行い、多くのマスメディアに取り上げられた。

コ 夏期、年末・年始、春休みは、休館日に臨時営業を行った。また、ゴールデンウィーク及び夏休み期間には夜間営業を行い、17時以降の入館者には夜間料金を設定するなど集客に努めた。

② 体験プログラムを通じた海洋文化の普及（資料 3）

小中学生（大人含む）又は小学生とその家族（保護者）を対象とした名古屋港水族館内でのスクール、講演会などを開催し、生物に関する知識を深める活動を行った。

ア 「君もドリトル先生になれるか！」「もっと知りたい！ダーウィン教室」の 2 種のスクールを実施した。前者はバックヤード見学を中心とするもので、夏休み期間に 16 回開催し、144 組 418 人が参加した。後者はバックヤード見学だけでなく、作業や実験・観察を行うワークショップ形式のもので、様々なテーマで 8 回開催し、38 組 113 人が参加した。また、閉館後に夜間の生物の様子を観察する「ナイトウォッチング」を 4 回開催し、38 組 106 名が参加した。

イ スクール事業や、ボランティアによる解説活動、様々な研究機関との共同研究などが評価され、令和 7 年 9 月に開催された日本動物学会において、動物学教育賞を受賞した。

ウ 学校団体や一般団体向けのレクチャーを積極的に受け入れた。オンライン及び館内外でのレクチャーや中学生の職場体験などの総実績は 125 件 6,704 人だった。レクチャーに関しては、従来の 4 テーマに加え、「ウミガメのサバイバルゲーム」「水族館の裏側のお話（レクチャーと水槽裏側の見学）」の 2 テーマを新たに追加した。前者は低学年児童から大人まで幅広く対応した参加型プログラムであり、後者は数年前から実施できていなかった「水族館バックヤードツアー」に代わるものである。

エ 海洋環境と生物の関係について解説する常設展示室「エコ・アクアリウム～海の未来を考えよう！～」において、環境教育や SDGs 活動に取り組む関係機関との連携に努めた（例：名古屋市環境局：エコパルなごやのワークショップ開催や SDGs 街（マーチ）への協力など）。さらに、一般の参加者を募集して水族館近くの海洋プラスチックを回収するイベント「名古屋港でゴミ清掃 ～清掃でみえてくること～」を開催し、海洋プラスチック問題の啓発に努めた。

オ 平成 23 年度から実施している共同研究「名古屋港におけるスナメリの周年変動」の調査結果を社会教育に展開する試みとして、令和 6 年度から「環境学習スナメリかんさつツアー」を実施している。館内でレクチャーを実施した後、海上からの観察を行い、今年度は 89 人の参加者のうち 84 人がスナメリを観察することができた。

③ 指定管理施設（名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ等）を活用した海事に関する展示等（資料 4）

名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじに所蔵する資料を展示することにより、海事思想にふれあう場を提供した。また、南極観測船ふじが 8 月 16 日に開館 40 周年を迎えることを記念し、様々な事業を実施した。

ア 開館 40 周年記念事業として、主なものでは以下の事業を実施し、開催期間中は多くの人出で賑わった。

事業名	内 容
企画展「南極観測船ふじのお宝展 2025」	普段展示していない所蔵資料の中から、特別展で紹介する資料を一部先行して展示
南極観測船ふじ&名古屋港水族館 「南極への旅」タペストリー	ふじと水族館の周辺の通路に、ふじ開館 40 周年を広く周知し、来る特別展開催の機運を盛り上げる「南極への旅」タペストリーを設置
特別展「南極観測隊と南極観測船 ～1 万 4,000 k mの旅路と 5 ヶ月間の 船内生活～」	歴代の南極観測船の紹介や、日本と南極を往復する間の船内での観測活動、生活などについて、ふじの時代を中心に、パネルや実物資料を展示
特別展ガイドツアー「南極に行った、 南極観測船ふじ学芸員と飼育係による ガイドツアー」	南極地域観測隊(夏隊)への参加経験を持つ、ふじの学芸員と水族館の飼育係により、特別展会場のふじ・ポートビル・水族館を巡るガイドツアー
特別展関連イベント「リアル謎解き ゲーム ～南極へ行った犬 ブルとホセとふ じの秘密～」	会場内に仕掛けられた謎を解き明かす参加型の謎解きゲーム(ふじの初航海となった第 7 次隊に同行した 2 頭の犬、ブルとホセがゲーム案内役のキャラクター)
「南極・昭和基地ライブトーク!」	国立極地研究所と共催して、南極・昭和基地とのオンライン中継イベントを水族館南館のシネマ館で開催。ライブトーク終了後は南極地域観測隊(夏隊)への参加経験を持つ、ふじの学芸員と水族館の飼育係によるトークセッションを実施
記念講演会「南極観測隊と南極観測 船」	長年にわたり南極地域観測に携わってこられた各分野の専門家の方々を招いて開催
「南極観測船の船内生活体験イベ ント ～元南極地域観測隊員による講座と ふじ甲板での体育大会～」	南極地域観測隊(夏隊)への参加経験を持つ、ふじの学芸員が、ふじの現役時代との比較を含め、船内での観測活動や生活などを解説。ふじ甲板では、2 代目しらせ甲板で行われる体育大会を疑似体験

イ 海や港の絵画、写真など地域住民による作品展示・鑑賞の場として、名古屋港ポートビル 2 階回廊ギャラリーを無料開放し、9 回の利用があった。

④ 体験プログラムを通じた海事思想の普及（資料 4）

「帆船模型展」「ボトルシップ展」「ボトルシップ体験コーナー」「南極教室」「南極観測船ふじでの星空観察会」「工作教室(3D 立体カード工作教室及びペーパークラフト教室)」「港から始まる 2026 年～地上 53 メートルから眺める初日の出～」などを実施し、海事思想の普及に努めた。また、SNS を活用し、名古屋海

洋博物館を始めとする各施設の情報発信に努め、フォロワー数はフェイスブック 886 人（昨年度 762 人）、インスタグラム 1,024 人（昨年度 587 人）となった。

⑤ 機関紙等による情報提供 ※名古屋港水族館（資料 5）

- ア 機関紙「さかなかな」を 4 回発行した。
- イ 学習教材「かんさつノート」を生物の状況に応じて改訂し、来館した小中学生の希望者に配付した。
- ウ 生物情報紙「新着！海の生き物レター」を 7 回発行し、ウミガメの産卵や、当館で繁殖した魚類の話題などを来館者に提供した。

⑥ 学生の職場訪問の受入れ

- ア 学生を対象とした職場訪問・体験学習などを受け入れ、名古屋港水族館及び名古屋海洋博物館などでの体験プログラムや解説を実施するとともに、学校団体等へのレクチャーを行い、海洋文化及び海事思想の普及に努めた。
- イ 名古屋海洋博物館では、大学の学芸員課程を履修している学生の博物館実習を受け入れた。また、愛知大学で「ミュージアム展示論」の非常勤講師として講義を行った。

⑦ ボランティアの育成・活用（資料 6）

- ア 名古屋港水族館のボランティア活動は、103 人の登録があり、タッチタンク、ペンギン、ウミガメ、鯨類の解説活動を実施した。年間活動延べ人数は 726 人、活動延べ時間は 1,046 時間であった。また、コロナ禍以降中断していたボランティアの新規募集を 7 年ぶりに再開し、113 人の応募者の中から 11 人を新たに登録した。
- イ 南極観測船ふじは、解説ボランティア（11 人）とメンテナンスボランティア（1 人）、名古屋海洋博物館は、解説ボランティア（4 人）とペーパークラフト工作教室指導員ボランティア（1 人）の登録がある。ふじは、年間活動延べ人数 143 人、活動延べ時間 309 時間 13 分、海洋博物館は、年間活動延べ人数 11 人、活動延べ時間 31 時間 5 分であった。

⑧ 海洋生物の調査研究（資料 7）

- ア 今年度の繁殖については、ペンギン類がジェンツーペンギン 1 個体、アデリーペンギン 1 個体、ヒゲペンギン 2 個体の計 4 個体、ウミガメ類がアカウミガメ 343 個体であった。
- イ 学術交流協定を締結している京都大学野生動物研究センター、京都大学ヒト行動進化研究センター、京都大学フィールド科学教育研究センター、岐阜大学応用生物科学部、三重大学大学院生物資源学研究科、金沢大学環日本海

域環境研究センターなどと共同研究を実施した。

ウ 京都大学東南アジア地域研究研究所及び野生動物研究センター、人間環境大学総合環境学部、名古屋 ECO 動物海洋専門学校と共同研究「名古屋港におけるスナメリ来遊状況モニタリング調査」を継続実施している。調査結果は館内外の展示やイベントで積極的に発信し、名古屋港の環境教育活動に活用している。

エ 学術交流協定を締結している三重大学大学院生物資源学研究科から学芸員課程を履修している学生の博物館実習、岐阜大学応用生物科学部などから飼育実習を受け入れた。

オ 日本動物園水族館協会、日本水族館協会が主催する研究会を始め各種学会などに参加し、研究発表を行った。

カ スタンフォード大学や高知大学などの研究機関と共に北太平洋でのアカウミガメ回遊経路調査 STRETCH (Sea Turtle Research Experiment of the Thermal Corridor Hypothesis)を 2022 年から 5 カ年にわたり実施している。バハ・カリフォルニア沖海域において、送信機を取り付けた 2 歳前後のアカウミガメ 28 個体を船から毎年放流（計 4 回）するもので、今年度は 7 月 8 日に放流を行った。

⑨ 研究会・ゼミナールの開催（資料 7）

ア 共同研究講演会は、名古屋港水族館と共同研究を行っている京都大学 ヒト行動進化研究センターの三田 歩 博士を招聘し、「シャチは世界をどう見ているのか、への挑戦」（参加者 132 人）を実施した。

イ 各界で活躍中の諸氏を講師に招き、港湾行政や海運の動向、変りゆく港の役割などを幅広く学んでいただく「名古屋港港湾ゼミナール」（参加者 106 人 32 社）を実施した。

（2）ガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する事業

① 名古屋港観光施設協議会の運営事業を始めとした観光振興事業（資料 8）

ガーデンふ頭の観光施設等で組織された名古屋港観光施設協議会の事務局を務め、相互の情報交換や連携を図り、観光客誘致に向けた観光推進 PR、誘致営業・宣伝事業を行った。

兵庫県西宮市、静岡県浜松市で観光展「ゴーゴー名古屋港！」を開催し、PR 動画の放映やワークショップにより認知度の向上と来港意欲の喚起に努めた。

「ツーリズム EXPO ジャパン 2025」（来場者数約 13 万人）に出展し、SNS フォローしていただいた方にノベルティを進呈する等により多くの新規フォロワーを獲得（約 2,300 人）した。

団体観光客及び学習旅行の誘致等のため、中部・関西方面等の幼稚園・学校関係者、旅行社を訪問し、名古屋港の最新情報提供及び旅行動向に関する情報

収集を行った。

また、「2025 台北国際旅行博」（来場者数約 36 万人）に参加し、台湾での認知度向上と観光客誘致に努めた。

② 情報誌の発行

名古屋港の観光施設の情報を掲載した無料情報誌「ゴーゴー名古屋港（名古屋港ガーデンふ頭ガイドマップ）」を、県内外の各所に配布することにより、名古屋港の観光情報を発信した。

③ 各種観光団体及び市内交通機関との連携を図る事業

県内の観光団体に加入し、各観光施設との連携及び情報共有に努めた。また、市営交通機関（名古屋市交通局）や水上バス（ガーデンふ頭～金城ふ頭～中川運河）の利用者に対して、各施設の入場料の割引を行い、この地域の活性化と名古屋港内の回遊性の向上に努めた。

「名古屋港水族館パートナーシップホテル」制度を運営して、近隣地域の宿泊施設と連携を図り、積極的な集客に努めた。

④ 指定管理施設（ガーデンふ頭臨港緑園・ジェティ等）を活用したイベントの開催及び賑わいの場の提供

ガーデンふ頭地区におけるイベントの実施・誘致を通じ、港に賑わいを創出し、親しまれる港づくりを推進した。

ア ガーデンふ頭臨港緑園においては、各種イベントが円滑に開催されるように主催者と調整を行い、今年度は「第 79 回 海の日名古屋みなと祭」「NAGOYA PORT WINTER ILLUMINATION」「ISOGAI 花火劇場 in 名古屋港」などの大規模イベントが開催された。

イ ガーデンふ頭の賑わいを創出するとともに名古屋港の PR や集客を目的としたイベント「名古屋港ガーデンふ頭ウェルカムポートフェスタ」を 3 月 20 日に開催した。会場には県内外から 23,660 人が訪れ、盛況のうちに終了した。

ウ 緑地維持や花壇整備等を行い、緑豊かで快適な環境づくりの推進に努めた。

エ ポートハウス（無料休憩所）を来港者の音楽演奏・鑑賞の場として無料開放し、84 回の利用があった。

オ ジェティ広場においては、警察署の交通安全啓発キャンペーンなど公共性の高いイベントを積極的に受け入れた。

カ 名古屋港水族館と同時開催の特別展「南極観測隊と南極観測船」の開催初日（令和 7. 7. 19）に合わせ、当日に限り何度でも入場可能な再入館制度を、従前から行っている水族館に加えて、名古屋港ポートビルの展望室、名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじの 3 施設にも試行的に導入し、ガーデンふ頭諸施設の利便性の向上と回遊性の創出に努めた。3 施設における令和 8 年 3 月 31 日

までの再入場者数は 6,992 人であった。

(3) 防災機能の強化及び災害対策の取組

① 避難訓練の実施

令和 8 年 1 月に緊急地震速報の館内発報装置を新設し、この装置を利用した発災時の初動対応訓練（シェイクアウトと初動対応確認）をスタッフ向けに実施した。また、初期消火訓練（消火器の使用方法）もスタッフ向けに実施した。

② 大規模災害発生を想定した基本協定の締結

葛西臨海水族園、新潟市水族館マリニピア日本海及び名古屋港水族館の三者による「大規模災害相互救援に関する広域連携基本協定書」（令和 6 年 3 月締結）に基づき、相互に災害対策訓練を視察するとともに、大規模災害時の救援活動等に関する情報交換を行った。

2 公益目的事業以外の事業

管理運営する施設の利便性を向上させる事業

ミュージアムショップ、レストラン、売店及び自動販売機を運営することにより、公益目的事業の一助とした。

また、名古屋港水族館法人サポーター制度は、平成 26 年 2 月の発足以来、生物の保護、繁殖研究など、水族館活動の更なる充実に貢献している。今年度末の会員数は、163 社 282 口であった。

3 その他

収入確保に取り組むとともに、話題提供や認知度の向上を目的に各種イベントを実施した。

(1) 寄付の受入れ

① 水族館 de クルッと寄付

カプセルトイを利用して展示生物の支援金を募り、海生生物への親近感を高めながら、運営資金の確保に努めた。カプセルトイ（1 回 500 円）は、水族館インフォメーション付近に設置し、寄付金は餌代に充当した（寄付額：10,345,000 円）。

② 名古屋市ふるさと寄附金（ふるさと納税）

名古屋市のふるさと納税の返礼品として、入館券などを登録している。
（登録返礼品）

大人券 1 枚、大人券 2 枚、大人＋小中券、年間パスポート（大人）

4 施設共通券（大人）、大人券＋御朱印帳

（返礼品登録口数、収入額）

517 口 2,053,600 円（3/31 現在）

(2) オリジナル物品の販売

① 御朱印帳・魚朱印の販売

名古屋港水族館オリジナル御朱印帳（1冊 2,500円）と水族館版御朱印「魚朱印」（1枚 300円）を作成し、生き物の誕生日などの記念日には、限定魚朱印を企画した。御朱印帳は 821 冊、魚朱印は 6,761 枚販売し、計 4,080,800 円の収入があった。

② オリジナル LINE スタンプの販売

名古屋港水族館の認知度や海洋生物への親近感の向上を目的に LINE スタンプ（1セット 120円又は 50 LINE コイン）を販売し、41,640 円の収入があった。

③ 水族館漫画の販売

開館 30 周年を記念し、名古屋港水族館の建設計画から現在に至るまでを描いた漫画「水族館つくろう物語」は、令和 4 年に前編、令和 5 年に中編、令和 6 年に後編を刊行して完結した。現在、名古屋港水族館ミュージアムショップにおいて販売し、好評を得ている。

④ 御船印の販売

ふじ開館 40 周年を記念して「御船印めぐりプロジェクト」に参加し、船版御朱印である南極観測船ふじ「御船印」（第 147 番社、500円）の販売を開始した（同プロジェクトは、船旅と発着地の地域振興を目的に、一般社団法人日本旅客船協会の公認事業及び国土交通省「C to Sea プロジェクト」の協賛事業として令和 3 年 4 月にスタート）。

(3) イベントの実施

水族館 de モーニング

開館前の名古屋港水族館の観覧とモーニングメニューを体験する特別イベント「水族館 de モーニング」は販売開始後に即日完売するほど大変好評であった（7/26 197 人、8/2 197 人、3/7 198 人 計 592 人が参加）。